

## 【ディスカッション】

補佐官の先例  
入庁の経緯  
補佐官のキャリア・人脈  
補佐官を支える組織  
補佐官のキャリアと能力  
補佐官の役割の違い  
補佐官と庁内の関係  
特別秘書制度の是非  
補佐官のリクルートメント  
補佐官としての久保さん

### 補佐官の先例

——（原田）このお話は大変興味深いと思います。ところで、そもそも長洲さんが久保さんを補佐官に任用しようと考えたのは、美濃部都政の影響だったのでしょうか。

久保：美濃部都政の影響もあったでしょうが、直接には横浜の飛鳥田市政が念頭にあったと思います。飛鳥田市長を支えた田村明さん（企画調整局長、後に法政大学教授）、鳴海正泰さん（同局専任主幹、後に関東学院大学教授）の活躍が有名でしたから。二人とも外部から入った人です。

ほかには、鎌倉市の森川欽也さん（元労組幹部、特別秘書）や藤沢市の山本篤三郎さん（元日本評論社編集長、企画調整局長を経て助役）の例もありました。藤沢の場合は始めからラインに入ったことになります。特別秘書制度があれば、それで補佐官を採用できますが、ない場合は一般職員として採用する。飛鳥田市政の鳴海さんの場合は一般職員として採用され、補佐官として仕事をしていました。僕の場合も同じです。

——（上林、大矢野）全国で革新自治体が生まれましたが、補佐官を使ったという例は少ないですね。藤沢市や鎌倉市の場合は、労働組合が推薦母体として強くて、その中にある程度人材がいたから登用しましたが、ほかに外部から登用したという例はないと思います。典型的な例は横浜市、東京都、そして神奈川県くらいじゃないでしょうか。関西はないですね。神戸市も京都府も大阪府も、外部から補佐官を登用したという話は聞いたことがありません。

久保：神奈川のようなやり方をやってみたいという試みは、いくつかあったんです。岡山県、広島県、熊本県、それから埼玉県の畑知事もやろうとした。ただ、ほとんどが内部登用だったんです。内部登用となると、やはり昨日まで同僚だった人が、ある日突然知事側近になるわけだから、やっかみ、ねたみ、反発が生まれて、結局機能しなかったようです。やはり補佐官を登用するとすれば、外部から自分の分身のような人を連れてくるしかないんです。出处進退をともにする一心同体のような人を連れてこないで、職員の競争相手になってうまく行かない。

——外国の自治体の場合はどうなのでしょう。

久保：米国メリーランド州と神奈川県は姉妹提携をしていますが、この州はさほど大きな州ではありませんが、補佐官が二〇人くらいいるようです。大きな州だと知事が替わると一〇〇名近く幹部職員が入れ替わるそうです。大統領の場合は、政治任命職が数千人といわれていますが、知事の場合でも少なくとも数十名は動くと聞きました。韓国でも道や直轄市の首長交替の際、外部からの人材導入が制度化されているようです。道の場合、副知事の一人は民間から登用することになっている。日本ではこういう取組みが遅れているんですね。補佐官制度があまりにも未熟で、広がっていない。ただ、これからは増えてくるんじゃないかと思います。

——（上林）都道府県全体が、明治いらいの官治（官僚支配）の要素を引き継いでいて、「政治」ではなく「行政」という性格が強かった。ところが、六〇年代に太平洋ベルト地帯を中心に基礎自治体に革新自治体が生まれて「政治化」し、その後七〇年代後半から都道府県が「政治化」していくという流れがあったと思います。それから三〇年たって、最近また都道府県が政治化している。だから補佐官が必要になるということだと思います。

## 入庁の経緯

——（大矢野）久保さんは、長洲さんの知事選の政策づくりにも関わられたのでしょうか。関わったとすれば、長洲さんとの個人的な関係で関わったのですか。

久保：長洲さんが選挙に出ることになって横浜に個人事務所を開いたんです。そこには学者も集まってきて、選挙向けに発表した「新神奈川宣言」を含めて政策的な議論をした。そこに僕も加わっていたということです。皆の議論をまとめるなどして、政策づくりに携わっていたのですが、選挙事務所とは全く関わりをもたなかった。

——（原田）どういう経緯で入庁することになったのでしょうか。

久保：長洲さんが候補者に決まったところに、長洲さんが最も信頼していた人物の一人、安東仁兵衛さん（元『現代の理論』編集長、故人）が長洲さんに「当選したら久保君を使ったらどうですか」と推薦していたようです。安東さんはその前に、僕を丸山真男先生（東大名誉教授 故人）にも会わせているんです。岩波書店近くの喫茶店で二時間くらい懇談しました。その夜、丸山先生が安東さんに電話してきて、「長洲さんには久保君がいい。長洲さんが柔で久保君は剛だ。ちょうどいいんじゃないか」といわれたそうです。

それから、選挙の年（一九七五年）の一月に、新橋の小料理屋に構造改革派の学者・研究者が二〇人以上集まって、長洲さんを励ます新年会をやったのですが、長老の井汲卓一先生（当時東京経済大学長）が会の終わりごろに、「皆さんに諮りたい。選挙では長洲君が当選するだろう。当選した

ら久保君と一緒に県庁に入ってもらおうじゃないか」と提案されたんです。皆「そうだ、そうだ」なんていっていた。一月の段階で長洲さんが当選したら久保を、というムードが学者グループの間ではできていたわけです。選挙が始まる前ですし、僕にはまだそんな意識はなかったのですが。

——（原田）正式に知事から話があったのはいつですか。

久保：投票日の翌日（四月九日）に、関係者が長洲事務所に集まって選挙の総括をやった後、近くのレストランで昼食をとって表にでたときに、長洲さんから「久保君、頼んだよ。四月二三日と一緒に県庁に来てくれよ」といわれたのです。僕は長洲さんが立候補をためらっていたとき、戦争中、軍に召集された経験のある長洲さんに「これは県民からの召集令状ですよ」といって決断を迫ったことがあるのですが、このことを覚えておられて「これは県民から選ばれた僕からの召集令状だよ。久保君の自縄自縛だね」といっていたはずらっぽく笑われました。

当時、毎日新聞社の経済部長に長洲さんの教え子がいて、人柄もとてもよかったので、長洲さんについていくならこの人がいいと思って、皆で口説きました。ところが、「新聞社の給料と県庁の給料は全然違う。年老いた両親がいるから、とても県庁の給料ではやっていけない」と言われて断られていました。他に適任者もなく、私が入ることになったわけです。

——入庁の話はスムーズに進んだのでしょうか。

久保：私が入庁することが公になったとき、最も強く反発したのが共産党でした。長洲さんの自宅まで行って、「久保を連れて入るなら与党をやめて野党になる」といわれたそうです。長洲さんは「それはやむをえません。私は久保君が必要だから入ってもらうんです」と答えたそうです。僕の入庁には自民党も反対でしたが、一番強く反対したのは共産党でした。

——（大矢野）若い頃共産党に入党し、離党したという経歴があったからでしょうか。

久保：その点は長洲さんも同じです。だから本当のところはよくわかりません。

もう一つは、僕が県庁に入るときに、支援団体では「部長級で入るべし、個室と車を要求すべし」という声が出ていましたが、僕は「それは絶対困る。特別の処遇はいらない。年齢相応の処遇で十分だ。個室も車もいらない。無理な入り方をすると必ず反発を生むからだめだ」といったんです。長洲さんも「久保君の考え方でいい」といわれ、処遇上の要求はしなかった。大部屋でみんなと仕事をすることになりましたが、これがよかったと思います。特別扱いで個室に入ったりしたら、情報も入らず、孤立して職員とのつながりがなくなってしまいますから。

## 補佐官のキャリア・人脈

——（原田）長洲選挙を支えた労働組合や社会党には、補佐官の候補者はいなかったんですか。

久保：やはり適任者がいなかったんじゃないでしょうか。それと社会党や組合からだど政治的に

ストレート過ぎて反発も出たんじゃないでしょうか。長洲県政の場合、三人の Political Appointee（政治的任用職）を採用しましたが、その一人、蔵隆司さん（当時三〇歳、元知事秘書、後に神奈川県芸術財団専務理事）は知事の選挙カーにも一緒に乗った人ですが、社会党県会議員団の書記でしたから、社会党色のあった人でした。しかし、党の推薦というより長洲さんがスカウトしたんだと思います。

——（原田）政党の方に補佐官をつけるという発想がなかったのですね。選挙では勝ったけど、県政をどう運営するのかというプランが政党や労働組合にはなかった。禁止規定はないんだから、五人くらい配置してもよかったわけでしょう。アメリカ大統領の場合には、選挙で勝ったときにはこの人がこういう職に就くというのが決まっていると思いますが。

### 補佐官を支える組織

——（大矢野）たしかに、政治的任用によって外部から補佐官を登用する仕組みを導入する必要があると思います。とくに日本の場合、牢固とした官僚組織をもっているわけですから、それと政治との間の緊張感をどういう形でつくっていくかという問題があります。補佐官制度は、この問題に対する一つの解答だと思います。

長洲さんの場合は、久保さんという有能な個人をブレーンとして県庁に入れた。入った久保さんはトップと官僚組織の間に入って相当苦労されたと思う。ただ、今後のことを考えると、そうした役割をすべて個人に負わせることでいいのだろうか。そういう役割を担うそれなりの組織やグループが必要なのではないのでしょうか。

久保：いや、僕の場合も全くの個人というわけではないのです。当時、一九六〇年代に共産党や社会党をまき込んで「革新の革新」を図るということで生まれた「構造改革派」（今でいえば西欧型社会民主主義に近い）という理論グループがありました。そのリーダーの一人が長洲さんで、私もそのグループに入っていました。具体的には、「経済分析研究会」という研究会があって、その代表が井汲卓一、今井則義（法政大教授）、そして長洲一二の三人だった。その研究会に私も出ていて、長洲さんと知り合っていたわけで、構造改革グループ、長洲理論グループの一員だった。非常にゆるやかなシンクタンクみたいなものがあったわけです。そういう中で、たまたま僕が一番転身しやすい条件があったということです。そういう背景がなくて、選挙だけで関わり合った人をいきなり連れてくるのではうまくいかないと思いますね。

——（原田）アメリカの大統領の場合にも、大統領に当選させるためのシンクタンクや政策集団があつて、当選するとその主要メンバーが政府に入ることになっています。ところが、日本の場合はそういう集団がない。最近ではマニフェスト（政権公約）を掲げて当選する首長がいますが、本当ならマニフェストをつくった集団から副知事とか補佐官がでてもいいはずだけど、そうなって

いない。マニフェストは、政策目標を定めるという点では意味があるけれど、政治構造の変革になっていない。その点は昔の久保さんたちの方がすぐれていると思います。

久保：せっかくマニフェストという新しい手法が出たんだから、マニフェストをつくった集団が政策集団として県政に関わるのが正道だと思います。これからは政策集団が形成されて、その政策集団の政策を実現するために選挙にでるというスタイルになっていくべきなのでしょうね。そして、その集団の中から行政にも入っていくというのが望ましいと思う。僕らは自然発生的な形だったけど、後から考えれば、理論・政策グループがあってその中から長洲さんが代表ででていって、僕が補佐役としてついていったという形です。端的、原始的形態でしたが先駆的実験でもあった。

——（原田）久保さんの場合には知事との年齢差もよかったんでしょう。ちょうど一回りくらい違いますから。それから、大学教授じゃなかったのが大きい。普通の大学教授では、とても補佐官はできない。こういう政策にすべきだとはいえるでしょうが、きちんと組織も人も動かしてそれを実現していくというのはできない。構造改革派のグループの中にも、有名な人、有能な人はたくさんいましたが、補佐官をできる人はいなかったと思います。

## 補佐官のキャリアと能力

——（磯崎）久保さんは、町議としての経験はありましたが、自治体政策を専門に研究されていたわけではないと思います。誘われたときに「やれそうだ」という気持ちはあったのでしょうか。

久保：僕は横浜市民で、飛鳥田市長の熱心な支持者でしたから、地元で区民会議の運動に参加したりして横浜のこと、神奈川のことはいえ地方議員の仕事をしたというのが大きいと思います。地方行政や地方政治の実態をつぶさに体験しました。質問で当局を立ち往生させたり、同僚議員の質問の代筆もしました。これは本当に得がたい経験でした。これがなかったら、県庁入りを引き受けなかったかもしれません。

また、町会議員を四年やった間に、毎月「町政ニュース」を書いて新聞に折り込んでいたんです。そうすると住民からの反応があるので、次にはそれを取り上げるというように、町民と議論できるような文章を書く訓練はしました。演説もうまくなりましたよ。駅前に黒山の人だかりを何度もつくったんですから（笑い）。

——（磯崎）後藤仁さん（元県参事、県立公文書館長、現神奈川大学教授）にはどういう理由で来てもらおうと思ったんですか。

久保：まず、僕が余りに多忙になってきたので助手が欲しかったのです。いろいろ探しましたがなかなかいない。その頃、後藤さんが『現代の理論』という雑誌に二回くらい論文を書いていたのですが、その内容がとてもよかった。それで編集長の安東仁兵衛さんに聞いて、彼の勤務先に会いに

行ったんです。本人はOKだったんですが、彼の上司に「会社にとっても欠かせない人間で、ミシガン大学に留学させたりした人だから、無理です」と言われた。すぐには無理でしたが、粘りづよく話し合いを続け、二年かけてきてもらいました。

後藤さんにはスピーチライターになってもらったのですが、自己主張が強くて、僕が原稿に手を入れると怒るんですよ。「検閲するんですか」なんて言ってね。「これは後藤論文じゃなくて長洲さんの名前で出る政治文書だから、このまま出すわけには行かない。僕の責任で直す」といって言い合いました。彼は「久保さんが手を入れると原稿が悪くなる」と怒っていました。僕の方は議会や各種団体から毎日のように小突かれていて、そうした現実感覚をもって文章を見るわけですから、どうしてもそうなる。

僕がいちいち直していると喧嘩になるから、最後は長洲さんに預けてしまいました。長洲さんが直す分には文句ないでしょうから。彼は後に「長洲さんに仕えている間に自分の文体を失ってしまった」なんていっていましたよ。最後は、長洲さん以上に長洲スタイルの文章を書きました。有能な人でした。

——（磯崎）二人の間で、政策について論争することはなかったのでしょうか。

久保：一二歳違いなので、世代感覚の差は大分ありましたが、政策面ではとくに対立点はなかったですね。ただ政治路線では僕のほうがいつもやや左だったように思います。

### 補佐官の役割の違い

——（大矢野）久保さんは、補佐官としての役割をかなり意識しながら務められていたと思いますが、この補佐官のイメージはどこからきたのでしょうか。どこかに原イメージがあってそれをモデルにして進めたのか、それとも実践の中から身につけられたものなのでしょうか。

久保：後者です。僕はいやいやながらとび込んだわけですから、補佐官という意識もなかったのです。ただ若いときから参謀とかブレーンという仕事に尊敬とか憧れの気持ちがあったような気がします。知事の通訳をしていた方が外国の事情に詳しくて、「アメリカには特別補佐官がたくさんいる。久保さんはまさにそれなんだ」と言ってくれたことがあって、そこから徐々に特別補佐官のイメージや自覚ができてきた。いろいろな仕事を無我夢中でやって、あとで思うと特別補佐官の仕事をしてたんだなということで、その経験を今回まとめてみたわけです。

——（磯崎、原田）

補佐官にも政策担当、政務担当、広報担当などタイプや機能の違いがあるのではないのでしょうか。アメリカ大統領の場合は首席補佐官がいて、その下に政策担当の補佐官や広報担当の補佐官がいるというように分かれていると思いますが、長洲県政ではどうなっていたのでしょうか。

久保：分担はありました。僕は政治関係や重要政策の企画、調整が中心で、蔵さんが知事の政治日程の調整、後援会や支援団体、各種団体などとの連絡調整など政務関係を担当してくれました。僕

がそこまでやっていたら身がもたなかったと思います。そういうのが苦手というだけじゃなく、ひとりの人間がそこまでやると権限集中や癒着の問題も起きやすいので、ノータッチにしていました。

本当は担当ごとに何人か補佐官がいるべきでしたが、三人が精一杯でした。ホワイトハウスでいえば僕が首席補佐官で、後藤さんが政策・広報、蔵さんが政務関係を分担していたということだと思います。

## 補佐官と庁内の関係

——（原田） そのほか久保さんを補助する職員のスタッフもいたんですよね。

久保：僕のスタッフとして各部から代表を出してもらい、一つのチーム（秘書室調査班分室、通称は私の職名に合わせて参事室、理事室と呼ばれていた）を構成していました。ただ、職員はローテーションで異動しますから、補佐官として成長していくわけじゃない。でも優秀な人材を配置してくれました。理事室に誰を送り込むか各部が競うようになったんです。後にこのスタッフのなかから教育長、企業庁長はじめ部長になった人が何人もでてきます。優秀な人材が集まっていたんですよ。

——（上林） 補佐官グループが知事に進言したり、知事の意向をくみ取っているから、現場はその情報がほしい。だから職員を送りこむということですね。

久保：ラインが補佐官に一番求めるのはその役割なんです。ラインが知事とじっくり話をする時間はあまりないですから、まず知事の考えを一番わかっている人から知事の意向を確かめ、それから知事に報告、相談しに行くというパターンができました。ともかく久保や理事室のスタッフについておけば後で知事につながるということで、大変便利にされたんです。

——（磯崎） 各部局が知事に政策的な判断を仰ぐときは、事前に久保さんに相談するというルールという慣行があったそうですが、そういうやり方は最初から浸透していたのでしょうか。

久保：いや、途中からです。一期目の早い時期に知事から「重要事項の報告、相談は事前に久保君に通しておくように」という指示がでたのです。というのは知事の日程が分刻みで、ラインとじっくり意思疎通を図る時間がなかなか取れず、知事もラインもイライラが募っていたのです。そこで知事が「久保君とは随時話ができるから、私への話はまず久保君にしておいてくれ」といわれたことが大きかったですね。また、各部局も知事と会えても三分とか五分、長くて一〇—五分ですから、十分な意思疎通ができないわけです。ある程度ゆっくり説明でき、しかも知事の考えをよく知っている人が欲しいというニーズは、部局側にもあった。そのニーズがうまくつながったということだと思います。ただ、補佐官のつなぎ方によっては、補佐官が「第二知事」といわれかねないおそれもないわけじゃないですか。だから両刃の剣です。その点はきびしくわきまえてやったつもりですが。

——（大矢野）その点の見識が重要だと思います。補佐官がトップの意向を下に伝えるとともに、現場の思いを上にもきちんと上げていく必要がある。上から下への命令ばかりで、しかもバイアスがかかったことばかりやると、現場が混乱する。その点の信頼がないと、うまくつながらないと思います。ところで、歴代の副知事とはどういう関係だったのでしょうか。

久保：最初は大分違和感をもたれましたが、だんだん僕の存在を認知してくれるようになり、副知事の中には役割分担をしようといってくれた人もいます。「政治・政策的なことは任せるけど、ラインの関係、とくに議会対策は私が責任をもつ」というふうに役割分担をしてくれた。補佐官が足りなかったのは事実ですが、副知事のなかで役割分担ができた人が何人かいました。

——（原田）久保さんは副知事も務められているのですが、副知事と補佐官はどう違うのでしょうか。

久保：基本的な違いは、補佐官はスタッフでラインには属さず、知事に直結していますが、副知事はラインのトップだということです。副知事はラインを統括する仕事で知事を補佐する。だから、僕は副知事になったとき非常に窮屈に感じました。三人の副知事のうちの一人として企画、県民、環境、渉外の四つの部を所管することになって、仕事の範囲が狭くなってしまった。

副知事になる前には、必要があれば全部の部局についてコミットできました。知事の政策や政治判断に関わるものであれば、どの部局でも担当者呼んで話を聞いて、必要な調整ができました。ところが、副知事になった途端に、部屋は変わる、車は付く、秘書が二人もつく、そして担当が決まり、所管部以外の部については発言が憚られる。目白押しの行事日程に追われて全県をかけめぐるといった生活に変わりました。ラインに入って非常に窮屈になり、勉強の時間も少なくなりました。

ただ、私は副知事になってからも補佐官的な役割を果たしたと思います。たとえば、理事時代から担当していたので、副知事になってからも KSP（かながわサイエンスパーク）の建設を担当しましたが、商工部は私の担当ではありませんから、これは知事特命だったのです。長洲さんから担当副知事に「KSP については久保君に特命で担当させるからよろしく」といってもらいました。

## 特別秘書制度の是非

——（大矢野、磯崎）都道府県によっては、条例に基づいて「特別秘書」の制度がありますね。特別職ですから政治活動も可能になります。美濃部都政のときの安江良介さん（後に岩波書店社長）がそうですし、現在の千葉県の堂本知事や長野県の田中知事にも特別秘書がついています。神奈川県にはそういう制度がなくて、現在の松沢知事も設置したいといっているのですが、議会が認めていません。久保さんの場合には一般職の公務員として入られたのですが、それはその方がいいという判断があったのでしょうか。

久保：一期目の最初の議会で特別秘書条例を通す方が難しかったんじゃないでしょうか。あの時点



では一般職としての採用の方がやりやすかったと思います。もちろん、数ヶ月は臨時的任用職員でしたが。また、東京などの例を聞いても、職員は特別秘書には仲間という意識を持たないそうです。特別な人だっという意識をもたれてうまくなじめないようです。

## 補佐官のリクルートメント

——（原田）本文で書かれている「補佐官の条件」の中でも、とくに一番目の「思想・信条の一致」という条件が重要だと思います。つまり、どんな場合でも政策の枠というか、政治的信条が同じでないと補佐官は務まらない。これは普遍的な条件だと思うんです。ところが実際にはこれが欠けている場合が多い。アメリカ大統領の場合には、同じ考えで選挙戦を戦うわけですから、そのなかから自然にスタッフとして入れる者が生まれるけど、日本ではそうではない。スタッフの供給源が政党にも労働組合にもない。選挙で票は供給できるけど、人が供給できない。だから、今後、意識的に人材を育成しないと長洲県政のようにしようとしても難しい。そこが重要だと思います。

久保：たしかに特別補佐官のリクルートメントは難しい問題ですね。各大学で政策大学院などができていますし、官民の人事交流も広がってきましたし、大きな進歩だと思いますが、僕の体験からいうと、まずチャンスに恵まれること、固い信頼関係があること、使命感や意欲が感じられることが基本で、その上で理論は三分、あと七分は現場で体で覚えるしかない。

——（磯崎、原田、大矢野）今後、補佐官機能のニーズが高まるというのはその通りだと思うのですが、どうやって補佐官をリクルートしたらよいのでしょうか。大学でもそういう教育をしているわけではありませんし、シンクタンクにもそういう人材は数少ない。また、アメリカの場合は人材が流動的ですから、政府をやめても大学やシンクタンクに戻るという対応ができますが、日本では難しい。

久保：しかし、アメリカだけではなく、お隣の韓国でもやっているんですよ。道や直轄市では、最低一〇人は外部から副知事、局長・部長級を連れてくるそうです。副知事の一人は外部からという制度になっている。どういうところからスタッフが集まってくるのか、調べてみる必要があります。ともかく労働市場がもっと流動化し、官民交流も含めて人材の移動、交流がもっと活発化することが前提でしょうね。先日も韓国の直轄市（道と同格）の副市長と会ったら、韓国の大企業「現代」に二〇数年務めたあと行政に入って副市長になったと言っていました。

——（磯崎）さらに、最後の方でお書きになっているように、補佐官は下働きに甘んじて、処遇や報酬も高望みしてはならないとなると、そんな役回りをいまの仕事をやめて担いたいと思う人はなかなかいないのではないのでしょうか。しかも首長が辞めたら一緒に辞めなければならないという不安定なポストです。

久保：それは考えようじゃないでしょうか。生きた政治や行政の現場に直接携われるわけだから、

書物で勉強するのとまるで違う。使命感をもってやれば、これほど有意義な、やりがいのある仕事は滅多にないと思います。もし短期間であったとしても、それは自分の人生にとって貴重な財産になるし、仕事上のキャリアとしても価値あるものになるはずです。僕が信州大の教官公募に応じ、超難関の倍率を突破できたのも神奈川での仕事が評価されたからのようです。結局、長洲さんに慰留されて神奈川を離れられず、大学には迷惑をかけてしまいましたが。いずれにせよ、官民ないし産学官の人事交流がもっとオープンに、もっと活発になることが補佐官の人材供給にも欠かせない条件です。

### 補佐官としての久保さん

——（原田）年齢も大きな要素ではないでしょうか。久保さんは当時四〇代半ばでしたから、たとえば数年で県庁生活が終わってもまた仕事ができる。これが五〇代後半なら難しかったのではないのでしょうか。

久保：たしかに、当時は大学（教員としての採用）の話もいくつかありましたから、いつまでも県庁に縛られなくてもいいという思いはありました。

——（大矢野）久保さんのお話には東洋的な印象があります。それは久保さんの中国文化に対する素養が、補佐官として成功させた原因の一つになっているのではないのでしょうか。組織にブレーンスタッフを入れるというのは近代的な発想ですが、役所文化の中でうまく機能するには東洋的な謙虚さが必要だという、そこに難しさがあるように思うのです。これに対して後藤さんは、どちらかといえばアメリカ流の合理主義だったのではないのでしょうか。

久保：長洲さんほどではありませんが、僕も東洋的的人生観をもっています。しかし、いまのご指摘は、僕についてはいささか深読みですよ。

それはともかく、長洲さんに仕えるようになって、知事の権力の大きさ、その権力者に仕えることの畏れをしみじみ感じました。予算査定などに立ち会うと、1兆数千億円のお金の使い道が知事の判断で次々に決まっていくわけです。一万数千人の職員の人事権も知事が握っている。県民の負託の重さをひしひしと実感できます。その権力者に影響を及ぼし得る立場にいる緊張感を、僕は絶えず感じていました。だからどんな時でも浮ついた気分にはなれなかったのです。僕が謙虚だったとすれば、それは権力への畏れからきています。

——（原田）久保さんは研究者として歩んできたけど、単なる研究者じゃなかった。政治家だったし理論家でもあったから、補佐官が務まったんですよ。単なる研究者、大学教授にはこんなことはできない。また、補佐官としての仕事は激務ですから、長期間はできないのではないのでしょうか。心身ともかなりきびしいと思います。

久保：そうですね。補佐官の仕事は無定量、無際限ですから、「命」は短いと思います。僕は補佐

官一二年、副知事四年やりましたが、これはとても長い例です。短くて数ヶ月、長くても数年という例が多いようです。僕の場合でも、夜も寝ないで働いたのは一〇年くらい、三期目の初めくらいまでです。状況によっては午前二時退庁、朝八時に出勤ですから。そういう仕事が一週間も続くとまいってしまいます。池子の米軍家族住宅建設問題のような大きな案件があって記者たちの夜討ち朝駆けのあるときも、深夜、早朝ですからきついですよ。副知事になって補佐官から離れてホットした面がありました。だから今でも家族には恨まれているんですよ。県庁ではいい仕事をしたかもしれませんが、全然家庭を顧みなかったと。